

令和3年度厚生労働省科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)
(分担)研究報告書

就労系障害福祉サービス事業所におけるテレワークによる就労の推進のための研究
(21GC1017)

就労系障害福祉サービス事業所におけるテレワーク雇用の推進及び
人材育成研究プログラムの開発に関する研究-事業所ヒアリング調査-
研究分担者 縄岡好晴 大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科

【研究趣旨】

本研究では、発達障害者が在宅就労支援プログラムを行う際に、就労移行支援事業所がどのような支援方法や訓練を行っているのか、その現状について調査をすることを目的とした。そこで、発達障害者へのテレワーク雇用に実績のある就労移行支援事業所の支援者8名（3事業所）に対し回答を求めた。その結果、実際のプログラムの内容及び障害特性に基づいた対応方法について明らかにすることができた。

A. 研究目的

近年、障害特性に配慮した働き方としてテレワークを導入する企業が多い。特に生まれながらの障害特性から環境との不適合が生じやすいASD者にとっては、このような働き方は今後の進路選択により良い影響をもたらすことが期待できる。特にASD者においては、環境との不適合から不安障害の併存率が高いことも指摘されており、(Muris et al,1998)、これらの取り組みが二次障害の併発を防ぐことが期待できる。

そこで、今回の調査では、自閉スペクトラム症者（以下ASD者）を中心とする発達障害者のテレワーク雇用への支援として、特にオンラインを活用した在宅就労支援について、どのような取り組みがなされるべきか、その基礎資料の作成を目的としてヒアリング調査を実施した。

B. 研究方法

1.対象者

ヒアリング調査に同意を得た就労移行支援事業所の支援者8名(3事業所)に対し回答を求めた。また、就労移行支援事業所のスタッフは発達障害を専門としており、在宅プログラムの対象者についても発達障害もしくは発達障害の特性を持った精神障害者であった。

2.調査方法

WEB(ZOOM)を使用した聞き取りによる調査を実施した。

3.調査内容

研究対象者は、事前に郵送した本研究の説明文書、同意書を読み、同意した上で研究に参加した。また同意後、同意書の記入を求め、WEB(ZOOM)(配慮事項については4を参照)にて、質問紙に沿って質疑をおこなった。ヒアリングの時間は約60分とした。そして、インタビュー内容は対象者の同意の上、録音し、インタビューデータより逐語録を作成し、分析をおこなった。

4.配慮事項

インタビュー時のテキスト・音声及び映像は、ZOOMによる機能を使った記録は一切行わないようにした。音声はネットワークから切り離されたICレコーダーで記録し、第三者への漏洩を防ぐこととした。また、録音を拒否された場合は、筆記にて記録を残すこととした。ZOOMの使用については、ミーティングに入る際はパスワードを設定し、パスワードは厳重に管理することとした。研究の説明時点で、明らかになっているZOOMの脆弱性についてはわかりやすく説明をした。以上の対応でもZOOMでの調査に抵抗がある場合は電話での調査に変更し、本研究の説明文を読み、同意したうえで研究に参加していただくよう配慮した。

5.倫理審査

本研究は大妻女大学生命科学研究倫理審査の承認を得た。(承認番号03-24)

6.分析方法

インタビューデータをGTAにより分析を行い、カテゴリー化をおこなった。

3.結果

オンラインを活用した在宅就労支援プログラム

事業所では、就労移行支援事業所で実施するプログラムの変更は行わず、現状のプログラムを活かし、補完的な位置づけとして、オンライン(ZOOM)、電話、グーグルドライブなどを活用し、在宅就労支援プログラム(表1,2参照)に取り組んでいた。

対象者のほとんどが、発達障害の特性である実行機能に困難さを抱えており、その結果、時間管理に課題がみられた。そのため、インタビューでは、「障害特性」をカテゴリーとして位置づけ、表3のようにどのような取り組みを行っているのかを明らかにした。

表1. 在宅訓練プログラムの内容について

時間	曜日				
	月	火	水	木	金
10:00 ~ 12:00	<ul style="list-style-type: none"> 出席報告(TEL) 朝の日報作成 タイピング練習 PC演習問題 全体:講座参加(ZOOM) 	<ul style="list-style-type: none"> 出席報告(TEL) 朝の日報作成 タイピング練習 PC演習問題 全体:講座参加(ZOOM) 	<ul style="list-style-type: none"> 出席報告(TEL) 朝の日報作成 個別面談(ZOOM) 	<ul style="list-style-type: none"> 出席報告(TEL) 朝の日報作成 タイピング練習 PC演習問題 全体:講座参加(ZOOM) 	<ul style="list-style-type: none"> 出席報告(TEL) 朝の日報作成 タイピング練習 PC演習問題 全体:講座参加(ZOOM)
昼食					
13:00 ~ 15:00	<ul style="list-style-type: none"> 個別課題(資格の勉強、就職書類の作成など) 帰りの日報作成 振り返り(TEL) 	<ul style="list-style-type: none"> 個別課題(資格の勉強、就職書類の作成など) 帰りの日報作成 振り返り(TEL) 	<ul style="list-style-type: none"> 個別課題(資格の勉強、就職書類の作成など) 帰りの日報作成 振り返り(TEL) 	<ul style="list-style-type: none"> ストレッチ講座(ZOOM) 帰りの日報作成 振り返り(TEL) 	<ul style="list-style-type: none"> 個別課題(資格の勉強、就職書類の作成など) 帰りの日報作成 振り返り(TEL)

表2. オンラインを活用した在宅訓練の実践内容

ツール	内容（課題の内容・使い方）	時間	結果
出席報告 (TEL)	体調の確認、連絡事項、本日起り組むことの確認	5～10分	口頭による報連相の練習になっている。体調により電話ができない場合はメールでの対応を受け付けている。
振り返り (TEL)	体調の確認、連絡事項、取り組みの報告明日の予定の確認		
日報作成	個別アカウントを割り当て、オンライン上に入力。朝と夕方の体調と気分の報告作業内容、感想を入力	各10分	文字による報連相、援助要求の練習になっている。日々スタッフが確認し、要支援事項は個別に対応
講座① ビジネスマナー講座	社会人として必要なマナーや知識を座学形式で学ぶ。オリジナルの資料を使用。	50分	在宅訓練者はZOOMをつないで受講
講座② JST講座（職場対人技能訓練）	職場で起こりうる対人場面をテーマにあげ、ロールプレイで良い/悪い例を提示。参加者同士で話し合い、講師がフィードバックをおこなう。	50分	在宅訓練者はZOOMで受講だが、ロールプレイ、ペアワーク、グループディスカッションはできないため聴講にとどまる。
講座③ JST講座（職場対人技能訓練）	職場で起こりうる対人場面をテーマにあげ、ロールプレイで良い/悪い例を提示。参加者同士で話し合い、講師がフィードバックをおこなう。	50分	在宅訓練者はZOOMで受講だが、ロールプレイ、ペアワーク、グループディスカッションではブレイクアウトルームを活用。
講座④ ストレッチ講座	外部講師を招き、座ったままできるヨガ、姿勢矯正のストレッチなどを実施。	30分	在宅訓練者はZOOMをつないで受講
タイピング練習	MIKAタイプを使用	10分	朝の作業のウォーミングアップ代わりに行う人が多い
PC演習問題	テキストをもとにWord、Excel、パワーポイントについて学習。進捗は管理表に記入しスタッフと共有	50～100分	
個別課題① 資格の勉強	本人が目指している職種に関する資格についてテキストをもとに勉強	50～100分	
個別課題② 就職書類の作成	履歴書、職務経歴書、自己紹介カード（障害や配慮事項について）を作成し、スタッフが添削する	50～100分	

表3. 発達障害者の特性に対する在宅訓練プログラムでの具体的介入

大カテゴリー	小カテゴリー
実行機能への配慮	・就業開始時刻15分前にPCの立ち上げを指示する
実行機能への配慮	・PCの立ち上げ、勤怠管理ソフトの立ち上げなどの流れが得意としない対象者に対し、Todoリストを作成する
刺激の統制	・物の配置場所を一定化させ、業務以外で気になる個所を減らす。

実行機能への配慮	・グーグルのチャット機能を使用し、細かなキュー出しをおこなう
実行機能及び記憶保持への配慮	・グーグルカレンダーのタイマー機能を使用し、次の業務内容や休憩時間の指示出しを明確にする
不安の軽減	・メールおよびチャット機能を活用し、ノルマ及び達成状況について見通しを持たせる。
イマジネーションへの配慮	・作業内容について修正を掛ける際、ZOOMの録画機能を活用し、録画内容をもとにフィードバックをおこなう
不安の軽減	・ストレス対処を目的に、決まった時間内でストレス対処方法をスケジュール化し、パターン化して取り組ませるようにした。

D. 考察

本研究により、発達障害者の在宅就労支援プログラムの実態を明かにすることができた。特に障害特性を想定したプログラムの提供と個別に基づく介入が実施されており、個の特性に基づいた介入がなされていた。これは在宅就労支援プログラムに限らず、事業所内外プログラムでも同様であるが、これらから、本人の特性について十分にアセスメントをしていく必要性についても示唆された。そして、アセスメントについては、独自のシートを作成・活用しており、特に就労準備チェックリストのような基本的な生活スキルなど、就労スキル以外の要素について丁寧に確認がなされていた。

E. 結論

ASD 者を中心とする発達障害者に対する在宅就労支援プログラムには、障害特性

を想定した介入の必要性と就労スキル以外の要素について具体的なアセスメントを実施していくことが必要である。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 学会発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 該当なし

2. 実務新案登録 該当なし

3. その他 該当なし

引用参考文献

1) Muris, P., Steerneman, P., Merckelbach, H., Holdrinet, I., & Meesters, C. (1998) Comorbid anxiety symptoms in children with pervasive developmental disorders. *Journal of Anxiety Disorder*, 12, 387-393